『瀬と淵』



アユを捕って喜んでいるカッパ?



淵には大型魚だけでなくカワガキも集まる

瀬は浅く、流れが速い水域です。小さな砂は流されて、大きな砂や礫が水底に残ります。太陽光が水底まで届くので、川の中で生産力が高い領域。礫上面には藻類が繁殖し、藻を食べるアユなどの採餌場、礫上下面は水生昆虫のすみか、礫間の空隙は魚の隠れ家、産卵場です。一方、淵は深く、ゆっくりと流れている水域で、砂よりも粒径の細かいシルト、葉や枝が底に溜まっています。大型魚だけでなく、瀬から流されてきた水生昆虫を食べる肉食性魚類も生息しています。カワガキ、カッパもいますね?!　蛇行する川の外側、巨岩や橋脚の周りなどが、典型的な淵のできる場所です。洪水時には水底の砂が流され、深い淵が維持・形成されます。この局所洗掘が進行すると、橋脚を支えられなくなったり、護岸や堤防の基礎が破壊される危険性が高まるので、古い河川工学では嫌われ者です。進行を止めるためにブロックや捨石で埋めたり、大規模な河道改修では水深の一様な河道設計がされるので、淵は失われることが多かったのです。しかし、最近では瀬と淵の重要性が認識され、淵を残す工夫もされるようになってきました。

瀬と淵、どちらかが大切とは言えません。二つの水域には異なる生物がおり、双方の水域を行き来する魚類も多いのです。ある先生は「夫婦のようにどちらも大事で、一方が欠けるとうまくいかない」と言います。瀬と淵は上下流に連続しているのが普通で、瀬と淵を含む河道区間を調査してこそ、その川の生物相を知ることができるのです。

大阪工業大学　教授　綾 史郎

来た・見た・聞いた　淀川雑記帳

前年度の冬、城北ワンドで「洪水時の流水の阻害にならないように」「日照阻害などの環境面への悪影響を取り除くために」と言う理由で、樹木の伐採が行われましたのをご存知でしょうか。現在はヤナギ類がほとんど伐採され、みごとなまでにスッキリしています。はてさて、このような環境の変化が、生物にどのような良い影響を与えてくれるのでしょう。今後は、いろんな角度から注意深く見守っていきたいものですね。

その一方、オオクチバスやブルーギルなど外来生物の駆除活動により、これまでに比べて魚類の生息環境は改善されています。そして近い将来には、城北ワンドにイタセンパラを放流する計画も進行中です。

これから楽しい夏休みが始まります。子どもたちの自由研究の題材を探しに、親子で城北に出かけてみるのもいいかもしれないですね。

（編集長・石山郁慧）

河川と環境の法律相談所
legal advice

水上オートバイの許可は?

人を自然に近づける 川いい会 法務担当　弁護士 藤原 武士

水上オートバイは船舶にあたるため、運転するには免許が必要です。では、免許さえあれば、どこでも利用しても良いのでしょうか。他県では水上オートバイ等のレジャーボートの利用水域を定め、違反者に対する罰則も定めた条例が制定されています。大阪府では、まだ条例による規制はされていません。しかし、衝突事故や騒音等のトラブルは増えています。今年の４月、大川で練習していた競技用手漕ぎボートの近くを集団で水上オートバイを走らせ、その波がボートの中に入り、あわや沈没しそうになる事件がありました。河川は漁船、遊覧船、競技用ボート等多くの航行があり、水域によっては航行ルールが決められています。航行ルールを知らなければ衝突事故になりかねません。また河川は漁業にも使われるため、漁業の妨げになってはいけません。水上オートバイを走行する場合は、河川事務所等に利用可能な水域、航行ルールを確認してから利用しましょう。

川と人　人と人を結ぶ
淀川管内 河川レンジャー
VER RANGER

デザイン監修：NPO法人nature works　泉野幸彦・ありさだあきよ
イラスト監修：NPO法人nature works　小村一也
取 材 協 力 ：人を自然に近づける川いい会
発 行 支 援 ：国土交通省 淀川河川事務所

淀川自然画報
2013年7月号
No.2
YODOGAWA SHIZEN GAHO

淀川水系の生物多様性を
見る・知る・楽しむ
生きものシグナル

水辺の博物誌



ハチを装い身を護る
オオスカシバ　*Cephonodes hylas*

夏の時期、低い植え込みの上でホバリングする姿は、一見スズメバチと見間違う「ベイツ型擬態」の好例。太い胴の模様や羽音を立てて飛ぶ様が捕食者を避けることで、我が身を護っています。幼虫はクチナシを食草とし、淀川河川敷から都心部の公園まで、見かける機会が多い昆虫です。

（画 / 馬場玲子）

発行責任者　淀川管内河川レンジャー・石山郁慧